バイロン・エアハート、宮家準編

伝統的宗教の再生── 解脱会の思想と行動

名著出版、 1983年、452頁

島田　裕巳

本書は従来顧みられることの少なかった宗教集団・解脱会に関する調査研究の報告である。今までの宗教集団の研究がどちらかと言えば社会変革の要素の強い集団に集中していたことから考えて、解脱会のような比較的目立たない集団の研究が現われたこと自体歓迎すべきである。また、本調査が共同研究である点にも大いに意義があろう。宗教史・宗教社会学・宗教心理学と異なる方法論を持つ研究者がその長所を生かして共同で調査に当たるならば、今までにない新たな視界からの宗教集団へのアプローチが生まれるはずである。

まず本書の全体から浮かび上がってくる解脱会像をまとめることから始めたい。

一、解脱会は民間信仰的な基盤の上に、神道や仏教の観念や儀礼を要素として取り入れて、独自の論理に従って再構成を行なっている。例えば、会祖岡野聖憲（俗名英蔵）の宗教体験から生まれた天茶供養は、祖先崇拝の観念を媒介にして受容されている。

二、会祖岡野は、その修行過程の中で様々な宗教家や信仰と出会い、それらを修正して自らの信仰の核としたが、彼自身の性格としては宗教家というよりむしろ事業家タイプの野心家であった。

三、組織としての解脱会の中核となるのは各支部で、会員の活動の場も支部が中心である。しかし、支部の自律性が強いために、かえって会全体の組織化が進まず、発展の妨げともなっている。また、米国解脱教会も日本の教団から独立した教団と考えられる。

四、会全体の組織化を妨げた大きな要因は、強力なカリスマ的指導者を欠いてきたことに求められる。有能な指導者であった岸田英山は、岡野の死の直後、自らの事業の失敗により渡米してしまった。

五、会の活動の中で重要な働きをしているものに御五法修業がある。御五法修業においては修業者に霊が下り、悩みの原因が指摘される。この修業は、心的コンプレックスを霊として象徴化した、すぐれて心理学的な精神治療過程と見ることができる。

六、解脱会の宗教的宇宙観においては、霊界と人間界との相互交渉の面に重点が置かれ、各種の霊修業や供養は両界のコミュニケーションの役割を果たしている。

七、霊修業・供養とならぶ会の活動のもう一つの柱は、会祖の生誕地・御霊地での大祭や、天皇崇拝をもとにした三聖地巡拝、支部での氏神参拝やお百度、境内の清掃など、集団によってなされる組織的な宗教行為の数々である。これは、会員の信仰心の強化に役立っている。

八、解脱会全体のイメージを総合すれば、個人の救済に力点を置いた保守性の強い宗教団体ということになる。こういったイメージは米国解脱教会にもあてはまる。

九、以上のような性格を持つ解脱会は、現在、いかにして前近代的な体質を克服して近代化を押し進めるかという課題に直面している。しかし、呪術的要素を捨て去ることは、治病宗教として始まった解脱会の根本を否定することにもなるため、それは極めて困難な課題なのである。

本書が提示する以上の解脱会像が果たして現実の解脱会を的確に表現したものかどうかを判断する資格を筆者は持たないが、日本における「教団宗教」の典型的な姿をよく把握しているとの印象を受けた。確かに、そこには大本教などに見られる宇宙論的なユートピア志向もなければ、キリスト教諸派の運動が示した高度の倫理性もなく、あるいは日蓮系諸教団の持つ大衆運動としての爆発的なエネルギーも欠けている。だが、むしろ解脱会が保守的な性格を持ち、あいまいさを包摂しているからこそ、宗教集団としての価値を持ち続けてきたのだとも言えよう。日本人の信仰を宗教学的にとらえようとするなら、解脱会のような集団の分析こそ欠かすことのできない研究である。その意味で本書は高く評価されるべきである。

しかし、なぜ解脱会が日本の信仰的風土の中から発生してきたのか、解脱会を教団として成立せしめている決定的な要因はどこに求められるのかといった根本的な問題については充分な解答が与えられていない。どちらかといえば現状の把握にとどまって、分析にまでは至っていないのである。それは、本書が共同研究でありながら、研究者それぞれの見解が必ずしも相互にかみあってはおらず、時にはまったく矛盾した見解を示しているからである。

例えば、ともに会祖岡野の生涯と信仰を問題にしている藤井健志（第一章「教祖・岡野聖憲の思想形成」）とバイロン・エアハート（第九章「日本宗教史における解脱会」）の場合、両者の岡野像は一致していない。藤井は、岡野の思想が立教以前と以後で連続していることを強調し、モラロジーの影響を受けた「自我没却の道徳」が彼の思想の中核にあると論じている。一方エアハート

は、岡野が社会的環境や家庭的環境において伝統的な宗教の影響を受けつつ、自らの革新的決断によって新たな信仰を切り拓いたと論じている。藤井の強く主張する「自我没却の道徳」についてエアハートが一言も触れていないのはどういうことなのだろうか。両者は岡野の世俗性と宗教性のどちらにポイントを置くかで見解を異にしながら、互いの説を否定していないために、読者の判断を難しくしている。さらに、解脱会の世界観を論じた河東仁（第四章「解脱会の宗教的宇宙観」）も「自我没却の道徳」にはほとんど言及せず、そこに重要性を見い出していない。これは、岡野の思想が解脱会を集団として成り立たせる上でまったく意味を持たなかったということなのだろうか。藤井の方法論は人間岡野の姿を追うあまり、宗教者岡野の姿を見失なっているとは言えないだろうか。

では、解脱会を宗教集団として成立させている要因について他の論文はどのような答えを用意してくれているのだろうか。ところが、本書では教団史の部分が独立して扱われず、各論文に分散して論じられている。したがって、岡野の個人的な宗教体験が共同性を獲得していくプロセスについてまとまった見解を得ることはできない。石井研士が第二章「解脱会の形成と現状」で「教団の形成と発展」の項目を立てているが、短い概観に終わっている。

石井は、コンピューターを使っての質問紙調査の解析によって、解脱会の現状の分析を行なっている。しかし、様々な分布図を使って教勢の概況をとらえようとしながら、どの分布図が教勢を最も的確に表わすものであるかを結論づけていないため、読者をいたずらに混乱させる結果に終わっている。また、支部の歴史的・地理的条件の違いに応じて支部活動が多様性を示していることを統計に基いて論じているが、その原因を日本人一般の信仰形態の多様性に求めている点は、読者を充分に納得させるものではない。新宗教と民間信仰の連続性と断絶性と言いながら、連続性と断絶性の相互関係が明らかにされていないからである。それは、例えば、三聖地巡拝や泉涌寺の解説金剛宝塔への合祀を天皇崇拝志向の表現とみながら、解脱会が天皇崇拝を独自の論理でいわば「読みかえ」ている点がもう一歩つっこんで分析されていないからではないだろうか。

解脱会におけるこの「読みかえ」の問題を扱っているのは河東（第五章「解脱会の修行」）である。河東は、精神医学やユングの分析心理学などの憑依現象の理論を紹介しながら、解脱会が「憑依現象の心的メカニズム」をたくみに利用していると述べている。つまり、解脱会は、人間の心に内在している心的メカニズムを霊の憑依ならびに浄化として「読みかえ」ているというわけである。ただし、精神医学や分析心理学の理論の紹介がこれほどまでに詳細である必要があったのか疑問である。かえって詳細に述べなければならなかったところに、そういった理論に対する一般の読者の理解の難しさを感じさせる。御五法修業における憑依現象についての解脱会の論理以上に、河東の理論は説得的であろうか。小沼優子が第七章「解脱会の救済の論理」で「五法修業は、悩む人の心の奥底にひそんでいる原因を『霊』の形で現前させる役割を果たしているともいえる」と述べているが、河東理論の最終的結論が小沼とどう異なるのか、読者にとって判断は容易でない。むしろ、修業を通して信仰を深めていくイニシエーション的な過程を個々の事例から追っていく試みがなされてよかったのではないだろうか。

紙幅の関係で個々の論文すべてを検討できなかったが、最後に宮家準による「結語」の部分を見てみたい。宮家は、解脱会が伝統的宗教を再生させ、社会の変化によって家郷を喪失した人間に新たな聖なる家郷を与えていることをその結論としている。しかし、伝統的宗教の再生という観点を取り入れているのは石井、エアハートだけで、藤井、河東、小沼の観点はそれとは異なっている。つまり、後者の見解は結論には生かされていないのである。また家郷喪失の問題については、他の論者はほとんど触れていない。したがって、新たな聖なる家郷を与えているという結論を導き出す過程で、御霊地の地理的構造という他の論文で触れられることのなかった新たな論拠に頼らざるを得なかったのである。宮家の「結語」は果たして本書全体の結論としてふさわしいものなのであろうか。

ここには、すでに述べたような共同研究としての不充分さが関係している。共同研究には、問題意識の共有と相互批判を含めた徹底した討論が不可欠である。むしろ本書を土台にして徹底した議論を行なうことによって、矛盾した見解から解脱会に対するより一層の理解が得られるのではないだろうか。